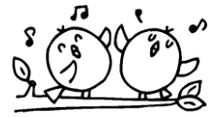
保育園の先生たちです。
一年間よろしくお願いします。

心のページ



「母性愛」

　およそ半世紀前（1970 年）に開催された日本万博のシンボル太陽の塔の作者は、著名な芸術家の岡本太郎でした。その母は純粋で情熱的な作家の岡本かの子です。彼女の「母性愛」という詩の一部を紹介します。

さらば、母なる我の
子をおもう母のこころを
語りもみん

折りから東京の外（と）の面（も）は秋雨（あきさめ）
うすら冷たく庭草（にわくさ）のぬれそぼつなか
眼に入るは、つわぶきの花の黄のいろ

子よ、と呼びかくべくあまりに遠い
我が子は、ふらんすの
巴（はり）里の都に

子よ、と呼ぶ声より先に
我が眼には、早や涙
秋雨にふるるつわぶき

あわれつわぶきの黄金の花よ
その花の黄金色こそ、稚き日の子がいでたち―制服のぼたんのいろに
制帽の徽章のいろに・・・・・

あわれ子よ
お茶喫むか、巴里の都に
絵を描くか、巴里の都に

お茶のみて母をや忘るる
絵を描きて母をや忘るる
忘るるも、よしやわが子

にっぽんの雨ふる夕
つわぶきの花をみつめて
母はおまえを懐かしみ泣く

岡本かの子 像

母は今宵、外出します
黒いドレスに赤い小粒の首かざり
おまえが母に一番似合うと言った服装

母はときどき掌（たなごころ）を見る
おまえを育てた時
おまえのおしりをときどき叩いて叱ったおもい出

叩いたのも
撫でてやったのも
愛情だった、みんな、みんな、愛情だった

（出典　岡本かの子　仏教人生読本（中公文庫））